「同じだという事」

エペソ人への手紙２：１９

July.24.2022

エペソ人への手紙２：１９（パワポ）

Preface

先週まで見てきましたように、聖書は、人は誰もが、どの人とも根本的に和合出来ていないこと、またその人間同士の不和ゆえにすべての被造物の秩序が壊れてしまったことを指摘しています。

神様は、その人間同士和合出来ていない状態を、弱肉強食適者生存という人間の考えだした自然法則に則った至って自然の成り行きだとは見なさず、むしろ、神がお造りになった喜びに満ちた永遠の平和という状態から完全に逸脱した不自然そのものだと仰います。

そして、本来あった秩序である和合状態・平和へとすべてのものを導くために、先ず何よりも、万物の不和の根本原因となった人を造りかえるために、ご自身犠牲となって、ひとり子イエス・キリストをこの地にお送りになった事実を明らかにしてくださいました。

この誰も思い描くことも想像することも、またもし、キリストにある平和が最終目的の神の救いの話を聞いたところで、その壮大さと深刻さをまともに受け止めることの出来る人間は誰もいないゆえに、もし神のなさるその救いのわざに感謝を覚えることが出来るならば、それさえも聖霊なる神様の成さるわざであり、こちら側（私たち人間側）には、０．１ｍｍ程さえも誇ったり、条件を満たしたなんてことは言えない恵みでしかないことを、パウロはこれまで丁寧に詳細に語ってきました。

つまり、平和をつくるために、私たち人間の力では到底打ち壊すことも、滅ぼすことも出来なかったありとあらゆる人間同士の隔ての壁と敵意を廃棄して下さったイエス・キリストの十字架ゆえに、エペソ２：１９のように「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと**同じ**国の民であり、神の家族なのです」と言えるようになったと結論付けてくれます。

パウロがこのように、ここまで結論付けなければならなかった理由は、未だにイスラエル人と異邦人という**違い**ばかり強調し、キリストにあって「同じである」「同じとされた」というとんでもない恵みが、感動が、エペソ教会の信徒ばかりか、私たちにも感動として受け止められていないように感じたからでした。

「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと**同じ**国の民であり、神の家族なのです」と言われるよりも、「こういうわけで、あなたがたは、あんな祝福も受け、こんな賜物も受けために、あの人たちと

は明らかに**違う**特別な人生を生きるようになる！　あの人たちよりも、物事よっぽど上手くいくようになるから！　違いがはっきり表れるから、まあ見てなさい！」と、他者との違いを宣言された方が、よっぽど嬉しいということです。

結局のところ、人にとっての最大の喜びは平和でありますが、先週まで見てきましたように、平和は私たちが作り出せるものではなく、神がキリストを通して成して下さるものであり、平和という喜びを享受するためには、キリストの内にある（居る）他ありません。
そして、キリストの内にある平和を享受するとは、エペソ書２：１９の御言葉の通り、「同じにされた」ということです。
同じ国民、同じ聖徒、同じ神の家族というように、「同じ」であることが平和です。

しかし、生まれながらの罪人である私たちは、その内側に住み着いている罪ゆえの劣等感のため、「同じ」であるということが元来嫌で癪に障ってしまいます。
その結果、比較をして優越出来るためのものを探すか、作るかして、隔ての壁を押っ立てていく習性が、自然と身についてしまいました。
でも、キリストの内にある平和に入れられ、そのまことの平和を知ると、違いよりも「同じ」であるということが喜びになり、神の内にあって「同じ」とされたことがこの上ない感動となります。

使徒パウロは、この感動をエペソ教会の信徒たちを含めた私たちすべての読者に語るわけですが、未だに変わらず、「同じ」じゃ嫌だと思ってしまう習性が、私たちの中に根強く残っている。
また、「同じだ」ということは、「一つだ」ということですが、**一つである**よりも**違い**を明確にして欲しいと、違いを明らかにすることによって、自分の価値を表したいと思ってしまっているから、
パウロは、改めて「こういうわけで」という結論を意味する接続詞を伴って、これまで話してきた「同じである、同じとされた」という感動の事実を、１９節で「同じ国の民であり、同じ神の家族なのです」と、言いまとめるわけです。

Part One

パウロはこれまで、神様の前にやましくもなく、悪びれることもなく、堂々としていられる人なんか誰一人としておらず、皆が皆が全く**同じ**罪人であり、また**同じく**イエス・キリストの血によってのみ神との平和を持つことの出来る、９９．９％ではない１００％神の恵みによる救いに与るしかない罪な存在であることを語ってきました。
それなのに、ともすると、私たちは、他者が持ち合わせていないだろうと思い込んでいる壁を打ち立てるために利用出来るご利益信仰ばかりを求め、神の内にある忍耐や苦難よりも、他者との違いや差別化を図ることばかりに心が向いてしまいます。

同じじゃ嫌なんです。
同じじゃ嫌だから、自分なりの美学を作り、作った基準に従った行いをもって優越感に浸っていたいと、自然に思ってしまいます。

では、いつ、この優越意識が取り壊され、「同じであること」が何にも代えがたい恵みであり、祝福であり、喜びであり、感動であるようになるかと言いますと、痛みを知った時です。
「同じ」になれていないことが、どれだけ痛い事なのかを骨身に染みるほどに神様の導きの中で体験し知った時、「同じである」ということのありがたさと、キリストにあって同じであるという平和こそ何にも代えがたい喜びであり、感動だと知ります。

聖書は始めから、人間皆同じであることが耐えられないという葛藤と対立の中に、その歩みが進められてきたことを語ります。
また、その葛藤こそ、すべての問題の本質であることを教えてくれます。

最初の男と女であるアダムもエバも、二人は一体であるはずの夫婦であるにもかかわらず、一体であることを壊してしまい争いました。
でも地上に、人間は自分たち二人しかいないので、相手を殺してしまうということまでは踏みとどまることが出来ました。
しかし、その息子たちに至りますと、殺意という衝動を抑えることが出来ずに、長男が次男を殺めてしまうという悲劇を起こしてしまいます。
その殺人の動機は、自分よりも年の幼い弟と「同等だ」ということが気に食わなかったことです。

それからの人類の歴史は、人との違いを見せつけるために、武器を作り、武器を手に取り、最新の武器を発明し、開発し、作り出し、どのようにすれば効率的に人を犠牲にし、その犠牲となった人たちを踏み台にして、自分がその上に君臨するのかばかりを考えながら、文明と称するそれらしいかっこいい名称を付けて、ありとあらゆる武器を身に付けてきました。

刀や盾や銃やミサイルのような明らかな武器ならば分かりやすいですが、一見すると武器には思えない芸術や学術や技術や戦術や算術や話術や読心術や錬金術や美顔術に至るまで、ありとあらゆる術を身に付けて、一つとなる事よりも、他者との違いを見せつけ、葛藤と対立を好んでいるかのように生んできました。

そんな罪な人間が、神の恵みによって救いに与り、神との平和を持ち、人との和合の大切さを教えられても、やはり、一つであることよりも二つであり続けることに邁進してしまう生き方から、いつ、一つとなることの大切さを心底実感できるかと言いますと、葛藤と対立の痛みを神の御手の中で心底体験させていただいた時です。

Part Two

聖書が書かれた理由は、葛藤と対立があるためだと話してまいりましたが、聖書に記された代表的な神を信じる者同士の葛藤と対立は、ヤコブとエサウの争いでしょう。

創世記２５：２１－３４（パワポ）

双子であった弟ヤコブと兄エサウの葛藤と対立は、母リベカの胎内にいる時から始まりました。

人は、生まれながらにして誰かを押し退けたいという本能があることをよく表している一節だと思います。

リベカの出産時には、弟ヤコブが兄エサウのかかとを掴んで、競争意識と対立意識をはっきりと表す赤ん坊として生まれました。

そして、弟に付けられた名前がヤコブです。

ヤコブとは、掴むという意味ですが、もっと言いますと、強奪する、奪うというような意味合いにもなる言葉です。

「良く親は、こんな名前をつけたなあ」と思いますが、「まあ、将来大きくなったら、何かを大きくつかむ大物になるんだぞ」という思いを込めてつけたのかもしれません。

まあいずれにしろ、生まれながらの葛藤関係を示す形でヤコブとエサウは生まれました。

そして、この双子の兄弟の争いは、イサクとリベカという仲睦まじかったはずのおしどり夫婦の仲さえも壊し、葛藤と対立へと誘っていきます。

巧みな狩人であり、野の人であった、男らしいという言葉は、今の時代死語なのかもしれませんが、当時の世界にあって、父イサクから見た兄エサウは、男らしいたくましさを持っていた人で、イサクはそんな長男エサウを愛しました。

一方、妻リベカは、野人ではないインドア派のヤコブを愛しました。

「親が子供を偏愛するはずはない」という私たちの理想と言いましょうか、妄想と言いましょうか、そんなものを生々しくも軽く超えてくる人間ドラマドロドロの家庭環境が、イサク、リベカ、エサウ、ヤコブの４人家族でした。

そして、何よりも忘れそうになりますが、忘れちゃいけないのが、４人とも主なる神様を信じるクリスチャンであり、神様から選ばれた神の民であり、彼らの血筋からメシアがお生まれになるという天の父のロイヤルファミリーでした。

それでも、こんなドロドロの家族関係になるのが、私たち人間の正直な姿ですし、「天の御父のロイヤルファミリーでもこうなんだ」と、何となく励まされたりもします。

やがて、二人の兄弟は成長し、弟ヤコブは兄エサウの隙をついて長子の権利を奪っていきます。
またさらに、２６章以降を見ますと、ヤコブは母リベカの助けを借りて、父イサクと兄エサウを騙して、まんまと兄エサウが受けるはずだった祝福まで奪い去っていきました。
当時の長子、つまり長男は、次男に比べて特に相続の面でとても有利な立場にありまして、弟が親の財産の１／３しかもらえないのに対して、兄は２／３を引き継ぐことが出来ました。
また何よりも、全世界の人々がアブラハムの血筋、イサクの血筋を通して祝福を受けると約束して下さった神様の御言葉の成就の継承者となることが出来たわけです。

このヤコブの長子の権利を略奪した行為は、結果的に信仰的な行為であったと聖書解釈上評されることもありますが、いずれにしろ、巧みに兄のものを略奪したという行為は静かながらも明らかな暴力であり、間違いであり、その間違った行為でさえも、神様がただただ神様の主権と哀れみゆえに、１００％恵みに変えて下さっただけだということを忘れてはいけません。
ヤコブが、上手い具合にやってのけたという事ではありません。

そして、何よりも、神様は、略奪するという行為をもって無理矢理神の祝福の継承者となったヤコブに、その行為が間違いであったことを彼の人生を通して、しっかりと教え、しっかりと味合わせ、しっかりと悔い改めることが出来るように導きなさいます。

兄を騙して長子の権利を奪ったヤコブは、兄エサウから命を狙われ、実家にいることが出来ずに、母リベカの兄ラバンのところへと着の身着のまま逃げて行くこととなってしまいました。
それも１年や２年の雲隠れ逃亡生活ではなく、２０年にも及ぶ逃亡生活となりました。
生まれる前から双子の兄弟の葛藤と対立は、結局、４人家族をてんでバラバラにしてしまいます。

そうして、逃げて行った先の叔父ラバンは、当初は、愛する妹の息子が自分を訪ねて来てくれたと喜びますが、次第にヤコブを僕のようにこき使い始め、ヤコブを騙してヤコブが望んでもいなかった自分の二人の娘と娘たちに仕えていた二人の僕を含む４人の身内の女性との重婚をさせるに至りました。
ここでヤコブは、騙されるということの苦々しさ、卑怯さ、痛みを初めて経験します。
そんな中でも人生生きていかなければならないことをしみじみと実感しつつ、また、ラバンの次女ラケルを愛していたがために、そんな詐欺まがいの生活にも黙々と従い、働き続けました。

そしてやがて、２０年がたった頃、神様から４人の妻たち、１２人の子供たち、そしてそれまで叔父ラバンの僕として働いて蓄えた財産をもって、故郷に帰るよう神様から促されて、２０年ぶりに故郷へと帰ることとなります。

Part Three

しかしここで、ヤコブを苦しめたのは、２０年前、殺意を抱き自分を殺そうとした兄エサウの存在でした。

叔父ラバンのところを離れて帰るところは故郷しかなかったものの、帰ったら自分のみならず４人の妻と１２人の子供たちを殺害され、財産もすべて奪われ、結局エサウがイサクの跡取りとなっていくのではないかと、非常に恐れました。

どれくらい恐れたかと言いますと、自分を守るために家族と財産を盾にして、先に目の前にある川を渡らせ、自分はエサウに殺されるかもしれないという恐れから、川を渡ることが出来ない程でした。

自分を守るために、愛しているはずの家族をも犠牲にしてしまうという人間の持つ惨めな本性まで露呈します。

そして遂に、２０年前、兄エサウに働いた騙す行為を清算しなければならない時がやってきました。

ところがその時、神様がヤコブに出会ってくださいます。

あの有名なヤボクの渡しでの神との格闘です。

震えおののいているヤコブに神が出会って下さり、最後までヤコブと格闘してくださり、最後は人間の体の筋肉の中で最も強く大きいもものつがいを外して、「ヤコブよ、もうこれ以上、あなたはあなたの力によって生きるのではなく、主なる神によって生かされているという事を実感しながら生きていく」というメッセージとともに、肉体的には傷を負ったものの、霊的には新しく生まれて、家族を盾にしていた姿から一転、自分が家族の先頭を切って兄エサウの前に進み出て行きました。　その場面が、

創世記３３：１－１１（パワポ）

２０年間の別離生活の後、ヤコブとエサウは再会し、二人は涙を流しながら抱きしめ合い、首に口づけするほどに互いに喜び合い、予想だにしなかった一瞬にして和解が起こりました。

弟は兄と同じであることを嫌い、知恵に長けた策略家であるかのような違いを兄に見せつけ、兄もまた弟と違い、血気盛んにも間違ったことに対しては、たとえそれが暴力的であったとしても、正面切ってその間違いを正そうとする正義感溢れる者であることを見せつけようとしましたが、結局、互いに違いを見せつけようとして、２０年間の苦難と忍耐へと導かれて行きました。

この２０年間という期間は、正に神様のなされた和解の業の準備期間であり、和解という実りを実らせる土壌を耕す行程でした。

神様が耕す土壌そのものであったヤコブは、エサウからの逃亡生活を通して、腹を空かすというひもじさを知り、腹を空かしたエサウを利用して長子の権利を奪うということが、どれだけズルいやり方であったのかを身を持って知りました。
また、叔父ラバンに騙されるという経験を通して、騙すという行為がどれだけ人を憤らせる事なのかを悟りました。
さらに、４人の妻と１２人の子供たちと財産の所有という物質的祝福を受けたところで、４人の妻たちと１２人の子供たちによる相次ぐ家庭内不和を通して、神様が与えようとしておられる祝福はこの世的な成功などではなく、すべての国民に霊的救いを与えるという祝福の神の宣教計画のために生かされていることだということを骨身に染みて悟りました。

一方、エサウも神の耕す土壌として耕され、長子の権利を軽んじた信仰のなさ、殺意に駆られて家族をてんでバラバラにしてしまった悲しみや痛みを通らされて愛が育ち、神の内に一つであること、同じ神の家族であること、同じように弱く、同じように恵みを受けている同じ存在であることを悟ったことでしょう。
このことが、二人の涙ながらの再開の姿に良く表れています。

Part Four

創世記３３：１０を見ますと、ヤコブが兄エサウに会った時、こんなことを言っています。

創世記３３：１０（パワポ）
私は兄上のお顔を見て、神の御顔を見ているようです。

この言葉は、エサウを神に祭り上げている偶像崇拝でもなく、エサウに対するおべっかでもなく、今目の前に繰り広げられている和解劇は、人間の力によるものではなく、神様が成さったものだというヤコブの告白の言葉です。

ヤコブとエサウにお与えくださった和解という恵み、同じであることの感動、一つとされたことの喜びを、正に主なる神様がお与えくださったと、そして、この恵みと感動と喜びを、後にメシア、イエス・キリストを通して、多くの人々に与える神の業の大事な通過点であることを、今、エペソ書を通して「キリストこそ私たちの平和である」ということを知っている私たちには、見えてきます。

また、創世記２８：１５で、神様がヤコブにこう言っている場面があります。

創世記２８：１５（パワポ）

神様はヤコブという土地を耕されながら、生まれながら人のかかとを掴んで生まれてくるほどの対立と葛藤を持つ罪人でしかないことを悟らせ、その対立と葛藤を恵みへと、喜びへと変えて下さるために、ヤコブに苦痛と忍耐を与えてくださったこと、また神様ご自身、苦痛と忍耐をもって同行してくださったこと、そして、何としてでもキリストにある平和を熱心をもって成就するところまで連れて行くというヤコブに対する愛ある宣言の言葉です。

ヤコブは、この御言葉の深い意味を一生涯かけて悟っていきました。
そして、「仲良くいたしましょう」「平和を愛しましょう」などのヒューマニズム的な見地から平和や和解を成立させることは出来ない、平和は神様の御業であることを否定できないところへと私たちをも導いて行ってくださいます。

このヤコブとエサウの和解には、後日談が旧約聖書の中に記されています。
それがオバデヤ書の内容ですが、ヤコブの子孫であるイスラエル民族をエサウの子孫であるエドム民族が憎しみ、ヤコブとエサウの和解関係、平和関係が、人間の力だけでは継承できないという史実が記されています。

エドムはイスラエル民族に対して「お前たちの祖先ヤコブは、私たちの祖先エサウを騙した。だから許せん！」と主張し、イスラエルはエドムに対して「お前たちは、長子の権利のない者たちなんだから落ちぶれていろ！」と見下げました。
人の力では、到底、平和を実らし、継続することが出来ない、同じであることよりも違いを見せつけて、互いに傷つけ合ってしまう実例として記録されています。

Conclusion

聖書の語る福音、またキリスト教だけが持つ独特な特徴は、人間を根本的に「同じ」だと言っていることです。
聖書の語る福音以外、祝福を基盤にして、人を「同じ」だと言ったり、「同じ」にしたりすることは出来ません。

もちろん、同じ利益のために一つになったり、同じ敵を前にして一つになったりはしますが、根本的に人を同じだと見なし、同じという恵み、喜び、感動に入れるものは、キリスト教以外、キリスト教の福音以外ございません。

平和や和平関係が壊れるのは、あまりにも簡単です。
私たちそのことを肌感覚で、よく知っています。
人は、互いの足りない部分を補い合い、認め合う和合よりも、自らの正当性を相手に認めさせたいという気持ちが先んじて、人を見下してしまいます。
それゆえに、クリスチャンであっても、平和が神様の目的であり、ビジョンであるという事を他の何かと代えてしまう危険性をいつもはらんでいます。

まことの平和、和解、和合、一つ、同じであるということは、肉体的、物質的、実用主義的、利益主義的、人本主義的功績ではなく、霊的戦いです。
だから、平和、和解、和合、一つ、同じであるために、霊的武具を身に付け、使う方法を学び、神様を平和と和解の現場の中心へとお招きする努力が必要です。
そのためには、祈りが当然必要ですし、聖書の御言葉の前に伏し、食し、探られ、聞き、血と肉となっていただくことが必要不可欠です。

また、共に祈り、共に賛美し、共に御言葉に聞き、共に礼拝を献げ、共に葛藤を神様の前に持って行き、その方の語り掛けに耳を傾けた時、平和と和解は、神様がお与えくださる恵みであり、賜物であり、ビジョンであり、目的であり、神様が主導権を握っておられる祝福だという事を覚えることが出来るでしょう。

キリスト者がキリスト者たる所以は、同じだという事、一つだということに感謝と喜びと感動を覚えられることです。
そういったものが、果たして私たちの中にあるのかを、確認し、吟味出来たら良いなあと思います。
また、もしそれが出来たなら、何と幸いな事でしょう。
そうありたいと願います。

お祈りいたします。
祝祷：エペソ２：１９